

## 入声字（音）の弁別及びその学習

薛, 華民  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/27301>

---

出版情報：比較社会文化研究. 34, pp.15-24, 2013-09-09. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン：  
権利関係：



表1 入声字の日本語音表記

種類	音表記	字数	割合 (%)	字例
[-t]	-ツ	99	90.0	月(ゲツ), 殺(サツ)
	-チ	3	2.7	七(シチ), 八(ハチ)
	-ツ/-チ	8	7.3	質(シツ/シチ)
	小計	110	100%	
[-p]	-ウ	34	75.6	答(トウ), 急(キユウ)
	-ツ	4	8.9	圧(アツ), 接(セツ)
	-ウ/-ツ	7	15.5	雑(ザツ/ゾウ)
	小計	45	100%	
[-k]	-ク	184	79.0	作(サク), 百(ヒャク)
	-キ	35	15.0	敵(テキ), 易(エキ)
	-ク/-キ	12	5.2	色(シヨク/シキ)
	-ツ	1	0.4	喫(キツ)
	-ツ/-ク	1	0.4	冊(サツ/サク)
	小計	233	100%	
合計		388		

全体的に見ると、入声字の音表記には特徴(パターン)があることがわかる。即ち、「-ツ・-チ・-ウ・-ク・-キ」のいずれかで表記されることである。その中でも「-ウ」は長音の一種として入声字でない漢字音節(例:「高(コウ)校(コウ)」など)にも多く現れるため、入声字の識別(特定)の特徴にはならないが、「-ツ・-チ・-ク・-キ」は基本的に入声字以外の漢字音に現れないため、入声字の識別(特定)の特徴として認められる(「欠(けつ)」, 「搾(サク)」の2字のみが例外<sup>4)</sup>)。

また、各種類の入声字の音表記をそれぞれ見ると、圧倒的に多い表記がある一方で、特殊な表記や例外もあることがわかる。

①「[-t] 類入声字:「-ツ」のみで表記される漢字は90%を占めるのに対し、「-チ」のみで表記される漢字は僅か2.7%であり、さらに全て数詞(七, 八)である。「-ツ・-チ」両方の表記をもつ漢字は8字あるが、ほとんど両表記の中の一方が基本表記となっている。例えば、「質, 節, 罰, 律」四字については「-ツ」より「-チ」の語例が圧倒的に少ないのに対し、「鉢, 吉」二字については逆になっている。「一, 日」二字も「-チ」のほうの語例が多いが、「-ツ」の語例も少なくないため、一概にどちらが基本表記なのかについては言えない。要するに、「[-t] 類入声字の音表記は、90%以上は「-ツ」となり、残りの数パーセントは「-チ」となっている。逆に、音表記が「ツ・チ」のいずれかで終わる漢字(p類入声字からのものがわずかにあるが)は基本的には「[-t] 類入声字だと言える。

②「[-p] 類入声字:約四分の三は長音「-ウ」となり、これはハ行転呼<sup>5)</sup>の結果である。一方、残りは「-ウ」以外に「-ツ」となる場合もある。特に「圧(アツ), 接(セツ), 湿(シツ), 撰(セツ)」の4字は「-ウ」の表記を持っていないため、「[-t] 類入声字との区別を失った。そして、表記が「-ウ」となった「[-p] 類入声字も、入声字でない長音(例:「高(コウ)校(コウ)」など)で終わる一般漢字との区別もなくなった。これらのことにより、音表記のみによる「[-p] 類入声字の識別(特定)が不可能になっていることは事実である<sup>6)</sup>。

③「[-k] 類入声字:「-ク」のみで終わる漢字は80%に近いが、それに対して「-キ」のみで終わる漢字は15%しかない<sup>7)</sup>。残りの約5%は「-ク・-キ」両方の表記を持っているが、どちらか一方が優勢で、他方は語例が極めて少ないことが基本である。しかし、ごく僅かな例外として、音表記が「-ツ」となった「喫」及び「-ツ・-ク」両音表記をもつ「冊」の2字がある。つまり、「[-k] 類入声字の音表記は、80%以上は「-ク」となり、残りの20%近くは「-キ」となっている。逆に、日本語の中で「-ク・-キ」で表記される漢字が基本的に「[-k] 類入声字だとも言える(例外:搾)。

### 1.3 入声字の中国語韻母別の分布

中国語の韻母は(V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub> + (C/V<sub>3</sub>))という構造になっているが、中古中国語においては以下のように三つに分かれている(劉2007:38)。

$$(1) \text{陰声韻(母)} = (V_1) + V_2 + (V_3)$$

(韻尾が子音でない韻母);

$$(2) \text{陽声韻(母)} = (V_1) + V_2 + C \quad (C = [n/m/ng])$$

$$(3) \text{入声韻(母)} = (V_1) + V_2 + C \quad (C = [t/p/k])$$

この三種類の韻母の韻尾において、陽声韻の韻尾と入声韻の韻尾は調音点が同じだが、調音法が異なるため、互に対応している(劉2007:38)。

調音点	陽声韻		入声韻
齒莖音	[-n](鼻音)	↔	[-t](破裂音)
両唇音	[-m](鼻音)	↔	[-p](破裂音)
軟口蓋音	[-ng](鼻音)	↔	[-k](破裂音)

現代中国語に至っては、陽性韻は「[-n/-m/-ng]」の3種類から「[-n/-ng]」の2種類<sup>8)</sup>となり残っているが、入声韻は韻尾「[t/p/k]」が脱落している。入声韻は韻尾が脱落した後、再び調音法が異なる陽声韻の韻尾がつくわけではないため、陽性韻ではなく陰性韻と合流するほかないのである。したがって、入声字を見つけ出す際、現代中国語では、韻尾「[n]」や「[ng]」を持つ鼻韻尾韻母以外の韻母に着目すれば良い。次の表2は鼻韻尾韻母以外の各韻母にある入声字数である。

表2 入声字の韻母別の分布

入声字		「t」類	「p」類	「k」類	小計 (割合)
韻類					
無韻尾の韻	「a」	15	9	1	366 (94.3%)
	「o」	6	0	11	
	「e」	12	4	29	
	「i」	24	16	64	
	「u」	10	1	52	
	「ü」	4	0	12	
	「ia」	1	5	0	
	「ie」	17	9	2	
	「ua」	2	0	1	
	「uo」	7	0	28	
	「üe」	10	0	14	
小計	108	44	214		
母音韻尾の韻	「ai」	0	0	7	22 (5.7%)
	「ei」	1	0	3	
	「ao」	0	1	4	
	「ou」	0	0	2	
	「iao」	0	0	2	
	「iou」	0	0	1	
	「uai」	1	0	0	
	「uei」	0	0	0	
小計	2	1	19		
合計		110	45	233	388 (100%)

表2の統計数字より分かるように、各種の入声字は主に無韻尾の韻母に分布している(94.3%)上に、それぞれいくつかの韻母に集中している。例えば、「t」類入声字の92%は「a/o/e/i/u/ie/uo/üe」の8つの韻に集まり、「p」類入声字の96%は「a/e/i/ia/ie」の5つの韻に、そして「k」類入声字の90%は「o/e/i/u/ü/uo/üe」の7つの韻に集っている。さらに考察すると、「p」類入声字が円唇性のある韻母(「o」で始まる韻母あるいは介音「u」か「ü」を有する韻母)とほとんど縁がないことも確認できる(例外は入「rù」のみ)。

母音韻尾の韻母には24字が集まっているが、全体の5.7%しか占めていない。その中でも特に、「t」類は2字、「p」類は1字しかない。また、「uei」韻には入声字がないことも確認できる。

また、表1で示しているように、各種類の入声字は全て複数種類の表記があるが、「k」類の入声字は特に多くて書き分けも甚だしい。その中の「キ」表記のある漢字(「-キ」表記しかない漢字と「-ク・-キ」両方の表記を持っている漢字を含める)の韻母をまとめると、次の表3のようになる。

表3 キ表記のある漢字の韻母別統計

韻母	i	E	Ü	ie	Ai	合計
「-キ」の数	41	2	2	1	1	47

表3より、「k」類入声字は多くの韻母に分布しているにもかかわらず、その中の「-キ」表記のものがほとんど「i」韻母に集中していることがわかる。言い換えると、「i」韻母以外の「k」類入声字はほとんど「-ク」表記である。

## 2 入声字の識別(特定)

これまで、入声字はどのようなものなのか、現代日本語や現代中国語においてどのような分布をしているのかなどについて述べてきた。日本語の音読みがわかる学習者は基本的にすぐ識別(特定)ができる(そもそも必要もない)が、本研究は漢字音学習の途中にある中国語L1学習者を対象としており、日本語音読みが未習得であることを前提に検討しているため、学習者の既習の知識に基づく入声字の識別(特定)方法を考えなければならぬと考える。

### 2.1 中国語音節要素による識別(特定)

#### (1) 韻母による識別(特定)

前述のように鼻韻尾韻母及び「uei」韻母には入声字が存在しないため、残りの他韻母をについて考察を行い、韻母における非入声字と入声字の比の値(入声字の数を1とする)を表4にまとめておいた。

表4 各韻母における非入声字と入声字

字種		非入声字数	入声字数	比の値
韻類				
無韻尾の韻	「a」	16	25	0.64 : 1
	「o」	7	17	0.41 : 1
	「e」	23	45	0.51 : 1
	「i」	202	104	1.94 : 1
	「u」	123	62	1.98 : 1
	「ü」	52	17	3.06 : 1
	「ia」	17	6	2.83 : 1
	「ie」	18	28	0.64 : 1
	「ua」	8	3	2.67 : 1
	「uo」	24	35	0.69 : 1
	「üe」	1	23	0.04 : 1
小計	491	365	1.35 : 1	
母音韻尾の韻	「ai」	55	7	7.86 : 1
	「ei」	36	4	9.00 : 1
	「ao」	71	5	14.20 : 1
	「ou」	55	2	27.50 : 1
	「iao」	53	3	17.67 : 1
	「iou」	41	1	41.00 : 1
	「uai」	9	1	9.00 : 1
	小計	320	23	13.91 : 1
合計	811	388	2.09 : 1	

母音韻尾の韻においては、いずれも入声字のほうが圧倒的に少なく、合計の数(23字、殆ど「k」類入声字)<sup>9</sup>も非常に少ないため、上述したように例外として個別に覚えれば、これらの韻母における入声字の識別(特定)ができると言えよう。

無韻尾の韻の場合、「üe」韻の漢字は「靴(か)」という字を除けば全て入声字(23字)である。そして、入声字の数が少ない「ia」韻(6字、殆ど「p」類入声字)と「ua」韻(3字)<sup>10</sup>は例外として覚えておけばよいであろう。さらに、「o」韻の非入声字は「波、破、婆、摩、磨、魔、模」の7字しかなく、さらにその中の「波、破、婆」の3字が同じ声符「皮」を持ち、「摩、磨、魔」の3字が同じ声符「麻」を持つため、記憶上負担がかからないと思われる。これらの非入声字さえ覚えれば、「o」韻全体の入声字(17字)の識別が可能になるとと思われる。

ここまで整理してきたのは、例外として扱っていい32字と「üe」韻の23字及び「o」韻の17字、計72字である。

①例外の32字:「率、刷、滑、画、肉、軸、六較、葉、脚、沸、北、黒、賊、凹、爆、告、酪、暴、百、麦、脈、宅、摘、拍、白、轄、峽、狹、押、圧、甲」

②「üe」韻の23字:「掘、決、絶、穴、血、雪、悦、越、閱、覚、角、爵、略、虐、確、却、学、削、岳、約、躍、月、楽」

③「o」韻の17字:「勃、伯、剝、舶、薄、鉢、博、泊、仏、没、抹、漠、墨、膜、黙、末、迫」

その他の韻は、いずれも非入声字数と入声字数がともに多いため、簡単に片付けられないようであるが、非入声字数と入声字数との比の値によって二種類に分けられる。一つは、「a/e/ie/uo」の場合である。これらの韻においては、入声字のほうが多い。もう一つは、「i/u/ü」の三つの韻である。これらの韻においては、非入声字が入声字より倍以上多い。これらの傾向はある程度入声の識別にとってプラスになるとと思われる。

## (2)「声母+韻母」による識別(特定)

5.1.1で述べたように入声は直接声母と関係がないため、もともと声母からの識別(特定)が考えられないが、声母を韻母と組み合わせると、入声字識別の有力な手掛かりともなる(胡2009:182-184、唐2002:176-178)。例えば、

①声母「f/l/z/c」が「a」韻と組み合わせ得た字は全て入声字である。それらは以下の11字である。

「擦、髮、伐、閥、發、罰、辣、撈、乏、法、雜」

②声母「d/t/l/r/z/c/s」が「e」韻と組み合わせ得た字は全て入声字である。それらは以下の16字である。

「策、側、測、冊、得、徳、楽、色、塞、特、責、則、摺、沢、熱、洪」

③声母「d/t/l/b/m/q」が「ie」韻と組み合わせ得た字は全て入声字である。それらは以下の14字である。

「別、迭、列、劣、烈、裂、蔑、滅、窃、切、鉄、貼、獵、暈」

④声母「k/n/r/sh/zh」が「uo」韻と組み合わせ得た字は全て入声字である。それらは以下の13字である。

「括、括、諾、弱、若、酌、捉、卓、濯、濁、着、説、拙」

これまででは、また計54の入声字の識別ができる。

## (3)「声母+声調」による識別(特定)

また、入声の消滅に伴い、昔の入声字は現代中国語では第1声(陰平)、第2声(陽平)、第3声(上声)、第4声(去声)のいずれかのグループに編入されてしまったため、現代中国語の声調だけでは入声字の識別が不可能である。ところが、声母との組み合わせで、入声字識別の手段として考えられる。つまり、現代中国語において「d/g/j/z/zh」などの声母で始まり、声調が第2声(陽平)である漢字は全て入声字である。これにより、計70字が識別(特定)できるが、そのなかの23字は前述の識別(特定)結果と重複している。ここでは、重複部分<sup>11</sup>を除いた残りの47字を以下のように提示する。

「度、的、嫡、笛、敵、毒、独、読、革、隔、閣、格、国、直、逐、竹、植、殖、職、值、足、族、昨、菊、局、極、籍、即、達、奪、疾、嫉、折、哲、卒、詰、結、傑、潔、節、吉、答、及、急、級、集、執」

以上、声母、韻母と声調という三要素及びその組み合わせをもって入声字の識別(特定)を考察して来たが、例外として扱われる入声字を入れ、識別(特定)できるのは計173字で、全体(391字)の半分にも及んでいない。ところが、これはあくまで音節要素のみに基づいた識別(特定)方法であり、さらに他の方法を加えて考慮すると、識別(特定)の範囲がもっと広がると思われる。

## 2.2 音節要素以外の識別(特定)方法

### ①形声文字の音符による識別(特定)

中国人は中国語の漢字音を記憶したり、記憶した漢字音を整理したりする際に、造字成分(音符)に注意を払っている<sup>12</sup>。このような背景には、漢字の多く<sup>13</sup>は音符という造字成分を有し、そして同じ音符を有する漢字の発音は同じ(近い)ことがある。即ち、漢字の大部分は形声文字であり、しかも中国語L1学習者は形声文字の音符を利用して発音を記憶・整理することになれていると言える。

日本語の漢字音(音読み)は基本的には中古中国語にもとづいて作られたため、同じ音符を有する漢字間の類似性が変わるとは考えられない。つまり、形声文字の音符を利用して日本語の漢字音(音読み)を記憶・整理す

ることも可能である。したがって、漢字の一部の入声字においてもこの方法で記憶・整理することができるのである。上述のことで、1.2で選択した入声字の範囲で、同じ音符を持つものを考察してみた。結果、同じ音符を持つ入声字は、83組で計229字があることが分かる。

表5 同音符の入声字

番号	音符	字例	番号	音符	字例
1	各	各, 絡, 客, 格, 閣, 酪, 略, 額, 落	43	察	擦, 察
2	白	白, 百, 伯, 泊, 拍, 舶, 迫	44	畜	畜, 蓄
3	尺	尺, 訳, 駅, 釈, 扱, 沢	45	伐	伐, 闕
4	合	合, 給, 拾, 搭, 答, 塔	46	告	告, 酷
5	商	適, 滴, 敵, 摘, 嫡	47	骨	骨, 滑
6	曷	謁, 葛, 渴, 喝, 褐	48	亥	核, 刻
7	兑	脱, 悦, 閱, 説	49	害	割, 轄
8	复	覆, 複, 腹, 復	50	或	域, 惑
9	谷	谷, 浴, 欲, 俗	51	萑	獲, 穫
10	及	吸, 及, 級, 急	52	集	集, 雜
11	失	秩, 失, 鉄, 迭	53	甲	押, 甲
12	叔	叔, 寂, 淑, 督	54	麻	歴, 曆
13	昔	昔, 錯, 借, 惜	55	荔	協, 脅
14	弗	払(拂), 沸, 仏(佛)	56	壺	陸, 陸
15	出	出, 屈, 拙	57	录	録, 録
16	專	縛, 薄, 博	58	宐	密, 蜜
17	冨	幅, 福, 副	59	末	抹, 末
18	黒	黒, 黙, 墨	60	業	撲, 僕
19	吉	吉, 結, 詰	61	切	切, 窃
20	夹	狭, 峡, 挟	62	屈	窟, 掘
21	立	泣, 立, 粒	63	却	却, 脚
22	列	列, 裂, 烈	64	弱	溺, 弱
23	壳	統, 殻, 読	65	杀	殺, 刹
24	莫	幕, 膜, 漠	66	十	十, 汁
25	辟	壁, 癖, 壁	67	石	石, 拓
26	若	匿, 若, 諾	68	食	食, 飾
27	舌	活, 舌, 括	69	式	式, 拭
28	蜀	触, 独, 濁	70	孰	熟, 塾
29	意	億, 憶, 臆	71	属	嘱, 属
30	楽	楽, 薬, 楽	72	朮	術, 述
31	則	側, 測, 則	73	束	束, 速
32	責	責, 積, 績	74	庶	席, 度
33	乍	酢, 作, 昨	75	毛	託, 宅
34	戠	識, 織, 職	76	屋	屋, 握
35	直	直, 植, 殖	77	宿	宿, 縮
36	竹	竹, 篤, 築	78	役	役, 疫
37	足	足, 促, 捉	79	由	笛, 軸
38	勺	約, 的, 酌	80	敵	撤, 徹
39	扌	拔, 髮	81	翟	濯, 躍
40	暴	暴, 爆	82	折	折, 哲
41	必	必, 泌	83	至	室, 窒
42	册	柵, 冊			

一つの音符に平均して2.8字が含まれる。その上、同じ音符を有する漢字同士は発音が同じ(近い)ため、音符を利用すれば、かなりの程度で学習者の記憶や識別(特定)の負担が軽減できる。また、入声字の種類についても、同じ音符を有する入声字は基本的には同じ種類であるため、音符を通じてある程度入声字種類の判断ができるのである。

これまでは少なくとも同じ音符を有する漢字の中の一つが識別(特定)できたことを前提に展開してきた。2.1の識別(特定)結果を前提とすれば、新しく識別(特定)できるものは以下のとおりである。

表6 音符を利用して識別(特定)できたもの

音符	識別できたもの	新しく識別できるもの
各	格, 閣, 酪, 略	各, 絡, 客, 額, 落
尺	扱, 沢	尺, 訳, 駅, 釈
合	合	給, 拾, 搭, 答, 塔
商	敵, 摘, 嫡	適, 滴
兑	悦, 閱, 説	脱
及	及, 級, 急	吸
失	鉄, 迭	秩, 失
弗	沸, 仏(佛)	払(拂)
出	拙	出, 屈
專	薄, 博	縛
夹	狭, 峡	挟
壳	読	統, 殻
莫	膜, 漠	幕
若	若, 諾	匿
舌	括	活, 舌
蜀	独, 濁	触
責	責	積, 績
乍	昨	酢, 作
戠	識	織, 職
竹	竹	篤, 築
足	足, 捉	促
扌	髮	拔
册	冊	柵
察	擦	察
告	告	酷
骨	滑	骨
害	轄	割
弱	弱	溺
屈	掘	窟
庶	度	席
毛	宅	託
合計		49字

②漢詩の押韻ルールによる識別(特定)

漢詩は句末に押韻するきまりがある。これを知らない中国語L1学習者は皆無だと言ってよい<sup>14</sup>。漢字が互いに

押韻するという事は、基本的にそれぞれの韻腹 (V<sub>2</sub>) 及び韻尾 (C/V<sub>3</sub>) が同様でなければならないことを意味する。韻尾で区別する入声字は、当然同じ韻尾を持つ同種類の入声字としか押韻しないのである。つまり、入声字で押韻する漢詩を通じて入声字を集中的に識別 (特定) できるだけでなく、入声字の種類も判断できると考えられる。例としていくつかのよく知られている漢詩を見ながら検討する。

例 1 : 七步詩 (曹植)  
煮豆持作羹, 漉豉以为汁<sup>15</sup>。  
箕在釜下燃, 豆在釜中泣。  
本是同根生, 相煎何太急。

各句末の「汁, 泣, 急」3字がお互いに押韻する。その中の「急」は上述の「声母+声調」の方法で入声字であることが判断できるため、他の2字も入声字であることが自ずとわかる。さらに、3字は同じ種類の入声字である。これに基づき、「音符」を利用すると、他の入声字の識別 (特定) ができる。たとえば、「汁」の音符である「十」も「泣」の音符である「立」も入声字であることが判断できる。

例 2 : 声声慢 (李清照)  
寻寻觅觅, 冷冷清清, 凄凄惨惨戚戚。  
乍暖还寒时候, 最难将息。  
三杯两盏淡酒, 怎敌他晚来风急?  
雁过也, 正伤心, 却是旧时相识。  
满地黄花堆积。  
憔悴损, 如今有谁堪摘?  
守着窗儿, 独自怎生得黑?  
梧桐更兼细雨, 到黄昏, 点点滴滴。  
这次第, 怎一个愁字了得!

各句末の「戚, 息, 识 (識), 积 (積), 摘, 黑, 滴, 得」の8字がお互いに押韻する。上述の「形声文字の音符の利用」という方法で「摘, 滴」は入声字であることが判断できるため、他の字6字も全て入声字だと判断できる。同様に、識別できたものを利用し、繰り返し形声文字の音符を利用して他の入声字を類推できるのである。例えば、「黑」という音符を有する「默, 墨」も入声字であることがわかる。

例 3 : 佳人 (杜甫)  
绝代有佳人, 幽居在空谷。自云良家女, 零落依草木。  
关中昔丧乱, 兄弟遭杀戮。官高何足论, 不得收骨肉。  
世情恶衰歇, 万事随转烛。夫婿轻薄儿, 新人美如玉。  
合昏尚知时, 鸳鸯不独宿。但见新人笑, 那闻旧人哭。  
在山泉水清, 出山泉水浊。侍婢卖珠回, 牵萝补茅屋。  
摘花不插发, 采柏动盈掬。天寒翠袖薄, 日暮倚修竹。  
各句末の「谷, 木, 戮, 肉, 烛 (燭), 玉, 宿, 哭, 浊 (濁),

屋, 掬, 竹」の12字がお互いに押韻する。その中の「竹, 濁」などは上述の「声母+声調」の方法で入声字であることが判断できるため、他の字も入声字であることが類推できる。また、上と同様、識別できたものを利用し、繰り返し形声文字の音符を利用して他の入声字の識別 (特定) ができるのである。例えば、「谷」という音符を有する「俗, 浴, 欲」も入声字であることがわかる。

例 4 : 满江红・怒发冲冠 (岳飞)  
怒发冲冠, 凭栏处, 潇潇雨歇。  
抬望眼, 仰天长啸, 壮怀激烈。  
三十功名尘与土, 八千里路云和月。  
莫等闲, 白了少年头, 空悲切。  
靖康耻, 犹未雪。  
臣子恨, 何时灭。  
驾长车踏破, 贺兰山缺。  
壮志饥餐胡虏肉, 笑谈渴饮匈奴血。  
待从头, 收拾旧山河, 朝天阙。

各句末の「歇, 烈, 月, 切, 雪, 灭 (滅), 缺 (欠), 血, 阙」の9字がお互いに押韻する。その中の「月, 雪」などは「ue」韻母を有するため、基本的に入声字と判断できるため、他の字も入声字であることが識別 (特定) できるのである。

例 5 : 雨霖铃 (柳永)  
寒蝉凄切, 对长亭晚, 骤雨初歇。  
都门帐饮无绪, 留恋处, 兰舟催发。  
执手相看泪眼, 竟无语凝噎。  
念去去千里烟波, 暮霭沉沉楚天阔。  
多情自古伤离别。  
更那堪, 冷落清秋节。  
今宵酒醒何处? 杨柳岸, 晓风残月。  
此去经年, 应是良辰好景虚设。  
便纵有千种风情, 更与何人说。

各句末の「歇, 发 (發), 噎, 阔, 别, 节 (節), 月, 设 (設), 说 (說)」の9字がお互いに押韻する。例4と同様、その中の「月」は「ue」韻母を有するため基本的に入声字と判断できるため、他の字も入声字であることが識別 (特定) できるのである。

それから、例4と例5は「歇, 月」を共有しているため、両例のすべての句末の字が互いに押韻することが簡単に判断できる。このように、共通字さえ見つければ、異なる詩の間のリンクが築けるということは、かなり生産性の高い方法だと言える。

### 3 入声字識別 (特定) の意義

まず、入声字の識別 (特定) を通じ、入声字全体を一

つのカテゴリー（さらに分類すれば、「p」類、「t」類と「k」類の三種類に分けられる）として系統的にかつ効率よく勉強・整理できる。

つぎに、入声字の識別（特定）により、入声字と非入声字の区別を明らかにし、「はじめに」のところに挙げた例（「実現」を「ジケン」と読んだり「負担」を「フクタン」と発音したりする）のような入声字音と非入声字音との混同問題を解消することができると思われる。

最後は、入声字識別（特定）を通じ、入声字を非入声字から独立させ、非入声字の部分の音韻対応関係を簡素化することができる。入声字が含まれる無韻尾の韻母と母音部との対応関係は表7のとおりである。

表7 無韻尾の韻母と母音部との対応関係（薛2012より）

韻母	前にくる声母	写し	例外
a	「b/d/t/zh/ch/sh」	「a/入」	
	「z/c/f/l」	「入」	
	「m/n」	「a」	
ia	「j」	「a」	涯, 崖
	「x/#」	「a/入」	
ua	「g/h/#」	「a」	誇
	「sh」	「入」	
o	「b/p/m/f」	「a/入」	
uo	「z/c/s/d/t/l/g/h/#」	「a/入」	所, 措
	「k/n/zh/sh/r」	「入」	
e	「g/k/h/#」	「a/入」	個, 効
	「zh/ch/sh」	「ja/入」	
	「z/c/s/d/t/l/r」	「入」	
ie	「j/x/#」	「ai/ja/入」	携, 揭
	「m/b/q/d/t/l」	「入」	
üe	「n/l/j/q/x/#」	「入」	靴
i	「z/c/s」	「i」	厘, 是, 洗, 碁
	「t」	「ai/ei」	
	「zh/ch/sh/n/l/b/p/m/#」	「i/ei/入」	
	「d/j/q/x」	「i/ei/ai/入」	
u	「g/d/t/l/z/c/s/m」	「o/入」	躡, 礎, 枢, 疎, 煮
	「h/n」	「o」	
	「b/p/k/#」	「o/u/入」	
	「f」	「u/入」	
	「zh/ch/sh/r」	「juu/jo/ju/入」	
ü	「l」	「jo」	呂, 履, 婿, 拘, 拘, 裕, 遇, 隅
	「j/q/x/#」	「(j)u/(j)o/入」	

ほとんどの韻母には複数の「写し」があるため、学習者に提示しても、あまり利用できないと思われる。ところが、入声字を一旦外すと、その対応関係が以下の表8で示すように、非常に簡単になるのである。

表8 無韻尾の韻母と母音部との対応関係

韻母	前にくる声母	写し	例外
a	「b/m/d/t/n/l/zh/ch/sh」	「a」	
ia	「x/j/#」	「a」	涯, 崖
ua	「g/h/#」	「a」	誇
o	「b/p/m/f」	「a」	
uo	「z/c/s/d/t/l/g/h/#」	「a」	所, 措
e	「g/k/h/#」	「a」	個, 効
	「zh/ch/sh」	「ja」	
ie	「j」	「ai」	携, 揭
	「x/#」	「ja」	
i	「z/c/s ch/p」	「i」	厘, 是, 洗, 碁
	「zh/sh/n/l/b/m/#」	「i/ei」	
	「d/t」	「ai/ei」	
	「j/q/x」	「i/ei/ai」	
u	「g/h/d/t/l/z/c/s/m/n」	「o」	躡, 礎, 枢, 疎, 煮
	「f」	「u」	
	「b/p/k/#」	「o/u」	
	「zh/ch/sh/r」	「juu/jo/ju」	
ü	「l」	「jo」	呂, 履, 婿, 拘, 拘, 裕, 遇, 隅
	「j/q/x/#」	「(j)u/(j)o」	

「i/u」以外の韻母はそれぞれの日本語の写しとの間に、基本的に一対一の関係をなしていることがわかる。これらの対応関係を学習者に提示すれば、間違いなく学習者の学習・記憶負担を軽減できると思われる。

### おわりに

以上、入声字の日本語音表記及び韻母別の分布を考察した上で、中国語の発音を手掛かりにその識別（特定）の方法を探り、またその識別（特定）の意義を検討してきた。

直接的な識別（特定）方法としては、「韻母」による識別（特定）、「声母+韻母」による識別（特定）及び「声母+声調」による識別（特定）などの音節要素による識別（特定）方法があげられた。また、間接的識別（特定）方法としては、形声文字の音符の利用や漢字の押韻ルールの利用などを挙げて検討を進めた。

残念ながら、単一の方法ですべての入声字を識別できるような方法が存在しないことが分かったが、上述の各方法を組み合わせて応用すると、殆ど入声字を問題なく識別（特定）できると思われる。そして、実際に、多くの学習者はすでにある程度入声字の音読みを習得しているため、習得したものを前提にこれまで提示した方法を応用すればもっと効果的に識別（特定）できると考えられる。

しかし、識別（特定）方法を導入する際、学習者の反発を買わないように、学習者の日本語レベル及び実際のニーズに合わせながら、馴染みのある、あるいは抵抗の少ない方法から徐々に取り入れた方が良いだろうと思われる。

それから、漢字熟語における促音については、本研究では触れなかったが、入声字の識別（特定）によって、その学習が促進されると予想できる。具体的には、(二字)漢字語は前項要素（漢字）が入声字である場合、一定の条件がそろえば<sup>16</sup>、促音化するが、前項要素が入声字でなければ、促音化しないのである。つまり、入声字は、漢字熟語における促音の発生の必要条件である。これについて、入声字音読み学習の過程の中で学習者に示せば役に立つと考えられる。

### 参考文献：

- 有坂秀世.1957.『国語音韻史の研究 増補新版』.三省堂.  
 王力.1986.『汉语音韵学』.山东省教育出版社  
 加納千恵子.1998.「漢字音の促音化について」.『筑波大学留学生センター日本語教育論集』  
 胡安順.2009.『音韵学通论』.中華書局  
 薛華民.2012.「中国人日本語学習者のための中日漢字音対照研究」.『日本学研究』22  
 千島英一編著.2005.『東方広東語辞典』.株式会社東方書店  
 陈访泽.1987.「试探讨现代日语词汇的促音规律」.『日语学习与研究』  
 唐作藩.2002.『音韵学教程(第3版)』.北京大学出版社  
 林史典.1982.『日本語の世界4(第五章 日本の漢字音)』.中央公論社  
 藤堂明保.1989.『学研漢和大字典』.学習研究社  
 閉克朝.1982.『入声』.湖北人民出版社  
 北京・商務印書館.2000.『新華字典改定版』.株式東方書店  
 香港・萬里機構出版有限公司+東方書店編集.2001.『広東語辞典ポケット版』.株式会社東方書店  
 劉晓南.2007.『汉语音韵学研究教程』.北京大学出版社

### 註

- 1 史書によると、この「四声」は南北朝時代の齊朝の潘約などの人によって、発見し命名されたそうである。「平」という字の声調と同じようなものを「平声」とし、「上」(中古音韻において「賞」と同じ声調である)という字の声調と同じようなものを「上声」、「去」と

いう字の声調と同じようなものを「去声」、そして「入」という字の声調と同じようなものを「入声」としたのである(王1986:92-93)。現代中国語における四声は、「陰平」、「陽平」、「上」と「去」の四つの声調を指し、少し様子が変わっている。

- 2 率(「リツ」→「lù」/「ソツ」→「shuài」); 楽(「ガク」→「yuè」/「ラク」→「lè」)  
 3 日本語音表記は「常用漢字表」に記載されている表記を参考し、中国語音表記は『新華字典』(北京・商務印書館2000)に記載されているものに準ずる。  
 4 「欠(qiàn)」は現代日本語では「缺(què)」と統一されたが、現代中国語では別の字である。「缺」は入声字であるが、「欠」は入声字ではない。現代日本語では「欠」が「けつ」と読むのは、明らかに入声字「缺」の読みが取り入れられたためである。また、「搾」は国字である。  
 5 歴史的仮名遣いにおいて、語中・語尾のハ行の仮名がその本来の発音から転じてワ行音に発音される(松村2006:「ハ行転呼音」)。「p」類入声字の場合は、「-p>-pʰ>-φu>-u」との経緯で現在の表記に至ったと考えられる(林1982:326)。  
 6 ただし、中国語の韻母を考慮に入れると、識別は不可能ではない。つまり、「-ウ」表記を有する漢字について、その中国語の韻母には韻尾がない場合、基本的に「p」類入声字だと判断でき、逆にその中国語の韻母には韻尾がない場合、「p」類入声字ではないと判断できる。  
 7 「キ」で終わる漢字音の前の母音はほとんど[e]であるが、一方「ク」で終わる漢字音の前の母音には[e]が現れない。  
 8 現代中国語では、[-m]は[-n]に統合された(劉2007:211-212)。  
 9 「ai」:「百, 白, 麦, 脈, 拍, 宅, 摘」(「k」類); 「ao」:「凹」(「p」類), 「爆, 暴, 告, 酪」(「k」類); 「ei」:「沸」(「t」類), 「北, 黒, 賊」(「k」類); 「iao」:「藥, 較, 脚」(「k」類); 「iou」:「六」(「k」類); 「ou」:「肉, 軸」(「k」類); 「uai」:「率」(「t」類)。  
 10 「ia」韻:「轄」(「t」類), 「押, 圧, 甲, 峽, 狭」(「p」類); 「ua」韻:「滑, 刷」(「t」類), 「画」(「k」類)。  
 11 「掘, 決, 得, 徳, 迭, 疊, 絶, 覚, 爵, 角, 脚, 雜, 責, 則, 扱, 沢, 軸, 宅, 酌, 卓, 濯, 濁, 着」  
 12 「一字认半边不会错上天」や「秀才认字认半边」などの言い方がよく知られている。この中の「半边」は音符のことを指す。  
 13 許慎による『説文解字』の六書分類によれば、音符を有している形声文字は漢字全体の約8割に達してい

るとされる。

- 14 中国の大学生は基本的には小学校の1年(場合によっては小学校に入る前、漢詩を覚える人も少なくない)から漢詩を習い始め、高校卒業まで十数年間勉強し続けている。大学入試の考察項目ともなっているため、ある程度漢詩を覚えなければならないのである。
- 15 現代中国語(普通話)において入声が消えたので、現代中国語の読み方を添加しても参考にならないと思われるため、あえて参考として入声が残っている広東語の読み方をつけた。広東語の読み方(表記)は千島(2005)及び香港・萬里(2001)を参考にした。
- 16 促音化の条件について、陳(1987)や加納(1998)などを参考にしてまとめると、以下のようである。
- ① '前項要素が「つ」で終わる+後項要素が「か/さ/た/は」行音で始まる'の場合、基本的に促音化する。同時に「は」→「ば」。
  - ② '前項要素が「ち」で終わる+後項要素が「か/さ/た/は」行音で始まる'、基本的に促音化。同時に「は」→「ば」。
  - ③ '前項要素が「く」で終わる+後項要素が「か」行音で始まる'の場合、促音化、変化しない及び両者共存という三つの可能性があるが、多くは促音化する。
  - ④ '前項要素が「き」で終わる+後項要素が「か」行音で始まる'の場合、促音化、変化しないおよび両者共存という三つの可能性が、促音しない傾向が強い。
  - ⑤ '前項要素が「一、八、十」などの数字である+後項要素が「か」行音で始まる'の場合、全て促音化する。同時に「は」→「ば」；'前項要素が「六、百」などの数字である+後項要素が「か/は」行音で始まる'の場合、全て促音化する。同時に「は」→「ば」。
  - ⑥ 特殊のもの(慣用音で読む熟語)

## Identification and Learning of *Nisshō-Kanji* (On)

Huamin XUE

“Jōyō Kanji Hyō [The Table of Chinese Characters in Common Use]” (2010) consists of 2136 Chinese characters. Nearly 20% of those Chinese characters are so-called *Nisshō-Kanji*, whose final consonant was “t/p/k” in Middle Chinese. In modern Japanese, the final consonant “t/p/k” of *Nisshō-Kanji* is preserved by adding a vowel (i/u); for example “慄”, a *Nisshō-Kanji* with a “t”-ending is pronounced as /rit-u/ while “歷”, a *Nisshō-Kanji* with “k”-ending is pronounced as /rek-i/. However, in modern Chinese (Mandarin), the ending part “t/p/k” of *Nisshō-Kanji* has totally disappeared; for example, the pronunciation of *Nisshō-Kanji* “慄, 歷” is the same as that of non-*Nisshō-Kanji* such as “利”, since all of them are pronounced as /li/. Therefore, most Chinese learners of Japanese cannot tell *Nisshō-Kanji* from non-*Nisshō-Kanji*. So when they are learning the pronunciations of those *Nisshō-Kanji* in Japanese (*Nisshō-Kanji On*), they have to remember them one by one. Moreover, they are also confused with *Nisshō-Kanji* and non-*Nisshō-Kanji*. It can be said that learning *Nisshō-Kanji* pronunciations is quite a large obstacle for Chinese learners of Japanese.

In order to help such Chinese learners with learning such pronunciation, the author first analyzed the Japanese *kana* readings of *Nisshō-Kanji* and the distribution *Nisshō-Kanji* in modern Chinese, and then tried to find ways of identifying *Nisshō-Kanji* using Chinese pronunciation. As a result, some direct methods and some indirect methods were discovered. Direct methods include those based on initials, “initials + finals” and “initials + tone”, indirect methods including using the phonetic symbol of semasio-phonetic characters and the rhyming rule of Chinese poetry to identify *Nisshō-Kanji*.

The conclusion of this article is that it is impossible to identify all the *Nisshō-Kanji* using only one method, but it is possible to identify most of them by combining the methods discussed here. As most of the Chinese learners of Japanese have learned some *Nisshō-Kanji* pronunciation, it will be more efficacious to use all the methods based on what has been learned.